

自己評価報告書

平成 23 年 4 月 19 日現在

機関番号：12603
研究種目：基盤研究 (A)
研究期間：2008 年度 ～ 2012 年度
課題番号：20241059
研究課題名 (和文) ジェンダーを巡る<暴力>の諸相—交差・複合差別における「家族親密圏」の学際的研究
研究課題名 (英文) Various Aspects of Gender Violence
—Interdisciplinary Studies on “Sphere of Familial Intimacy” in Crossing / Complex Discrimination.
研究代表者 栗屋 利江 (AWAYA TOSHIE)
東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授
研究者番号：00201905

研究分野：複合新領域
科研費の分科・細目：ジェンダー／ジェンダー
キーワード：思想・運動・歴史

1. 研究計画の概要

本研究の目的は、社会的に構築された差異の関係性であるジェンダーをめぐる支配と差別の構造を、容易には解消しがたい<暴力>の諸相としてとらえ、そこから生じる権力関係の複雑で複合的な諸問題を分析し、その分析を可能にする適切な枠組みを理論的に構築することである。その際着目するのは、グローバル化する世界、ポストコロニアルな状況における「家族親密圏」である。ここで、「家族親密圏」とは、「社会的生の生産と再生産の現場」を意味しており、それを過去と現在の視点から、歴史学、政治学、社会学、哲学・思想史といった分野を学際的に横断し、解明することを企図している。

具体的にいうと、

(1) ジェンダーの視点から、とくに「家族親密圏」という分析概念を設定し、これに焦点を当てることをとおして、あらたなジェンダー概念を構築すること、(2) 「家族親密圏」の構造とそこにある固有な社会的実践ならびに権力関係の経験的、歴史的、理論的な問題を分析し、解明すること、(3) こうした理論的枠組みに基づき、現実には生起している「暴力」にどのように立ち向かっていけばいいのか、といった解決策を探る、の三点である。

2. 研究の進捗状況

まず、上記目的 (1) を達成するために、ジェンダーの基本概念的な分析、およびジェンダーと「家族親密圏」の関係性の調査のために、国内外に分担者ならびに大学院生を派遣した。そこで得られた結果をもとに、研究報告会を開催した。また、国内外からジェンダー研究者を招聘し、研究会・ワークショップ

を開催して、家族形成とジェンダー、暴力とジェンダーといった側面から「家族親密圏」という概念を検討した。それによってジェンダーという概念は、より大きな枠組みである社会においてよりも、むしろ家族といった親密圏において、より顕著に、複雑に形作られるものであるということが判明してきた。

目的 (2) を達成するために、平成 20 年度には外国から研究者を招聘し、「香港における家族に優しい政策」(Leung Lai Ching・香港)、「問題としての「家」再論」(鄭肯植・韓国)を開催、平成 21 年度は「南北戦争期のアフリカ系アメリカ人の家族」(Heather A. Williams・アメリカ)「賢さを育成する—現代インドの中流家庭における母性」(Anjali Bhatia・インド)、「読書と性差の近世」(ロナルド・トビー・アメリカ)を開催し、各国の状況と日本を時間の縦軸と横の広がりという視点をもって検討した。各国・各地域における社会的実践から、その土地固有の家族制度を分析することで、ジェンダー的権力構造を明らかにする手がかりを得た。

目的 (3) を達成するために、平成 22 年度には女性国際戦犯法廷で活躍したパトリア・セラーズ史を招聘し、日本軍の性奴隷制についての講演を開催した。実際重要であり、今後解決策を探る方途を検討する一助となった。

3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

理由：目的 (1) ～ (3) のそれぞれについて、「研究の進捗状況」に記した通り、これまで 3 年間にわたる研究により、各国固有の社会的実践や権力関係について、具体的な個別テーマに関しての分析がなされており、新

たな概念構築の手がかりをつかめたと考えられる。また、「暴力」の具体例も明らかにされ、それに対する解決策への目途がつきつつある状況である。

4. 今後の研究の推進方策

代表者ならびに分担者は、海外調査をさらに加え、これまでに明らかにされた概念や方法と実態との乖離を明らかにし、さらに理論を精緻にして、より普遍性のあるものにしていく。その成果は論文集として出版する予定である。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 14 件)

金富子、ジェンダー史・教育史から見た植民地近代性論、『歴史学研究』867、査読無、2010、34-45 頁。

吉田ゆり子、幕末維新期における横須賀大瀧遊郭、『年報 都市史研究』17 号、査読無、50-63 頁。

〔学会発表〕(計 11 件)

粟屋利江、「植民地近代性」を考えるととは？」、日本南アジア学会設立 20 周年記念連続シンポジウム、2008 年 6 月 23 年、東京大学

〔図書〕(計 28 件)

金富子・中野敏夫編『歴史と責任－「慰安婦」問題と一九九〇年代』、青弓社、2008 年、686 頁。

岩崎稔・上野千鶴子・北田暁大・小森陽一・成田龍一編『戦後日本スタディーズ』、紀伊国屋書店、2008 年、372 頁